

2日目 オフィチエンシム アウシュビッツ第1収容所—2

収容体験者との出会い—言葉が通じなくてもわかるつらさ—

収容体験者のスモーレンさんは元アウシュビッツ博物館の館長さん。

収容中は書類・記録作成に関わっていたとのこと。

*あとでお聞きしたらなんと90歳だったそうです……

立花先生はスモーレンさんにお会いしたとき、じっと目をみて握手されました。

会いたかったけれど、やっと会えた人、

そしてもう二度と会えないかもしれない人、

ここで出会えたことを、何かに感謝しているように。

スモーレンさんは、まさしく「語り部」でした。

収容されていたときのこと、アウシュビッツで起きたこと、を直接語っていただきました。

実際にアウシュビッツで起きたことというのは館長職にあったときに何度も話をしたことなのかもしれません。

淡々とした口調で語っていらっしやいました。

けれども自分の体験のところになると、少し涙がでていたようでした。

強制労働のとき足が痛かったという話、あれほどつらい思いをしたことはないということ。

通訳を通してだったので、一部わかりにくい箇所はありましたが、

それでもつらさは伝わりました。

そして、長崎、広島の前爆の話にも触れられました。以前、訪問されたそうです。

こちらにも戦争の生き証人が失われています。

予定時間を越えて、3時間もお話をしてくださいました。

最後にみなで記念写真をとり、外に出たときには、すでに日はかなり傾いていました

